菅茶山顕彰会会報

第 27 号
発　行
菅茶山顕彰会
2017年3月1日

茶山の閭塾にて學文の図（「菅波信道一代記」菅波信道著より）

菅茶山辞世の詩歌に想う

菅茶山顕彰会会長　鵜野　謙二

今年、平成二十九年（二〇一七年）は 菅茶山没後百九十年の節目の年に当る。命日は八月十三日である。

文政十年（一八二七年）、八十歳を迎えた茶山は多くの人々から祝賀を受けたが、五月に入り病（胃癌）に臥した。茶山には三人の妹と二人の弟がいたが、三女好（まつ、みつ）以外は皆他界していた。妹好と姪の敬の二人が茶山の最期を看取った。

敬（次女チヨの子）は萬年（次男汝梗の子）と結婚、萬年に病気で先立たれ、廉塾の都講として招かれた北条霞亭と再婚したが、霞亭も若くして歿している。子も殆どが早世し、当時残っていたのは、萬年の子、菅三のみであった。茶山の死後、菅三が菅自牧齋と称し、廉塾を継いだ。

死期を悟った茶山は、好と敬に対し「臨終訣妹姪」と題する別れの漢詩に和歌二首を添え、現身故に叶わぬ同胞への参商之隔の想いを自らの筆に託している。

「うき世と八　けふ（今日）をかき（限）りにへた（隔）つれと
人のなさけは　わすれかねつも」

臨終訣妹姪

（遺稿　巻七所収）

身殲固信百無知　身殲ぶれば固より信ず百て知る無きを
那有浮生一念遺　那んぞ浮生一念の遺る有らんや
目下除非存妹姪　目下　除非　妹姪を存す
奈何歡笑永參差　奈何せん歡笑　永く参差するを

「身なけれは　こころもなき八　かねてしれと　たたはらからの名残をそおもふ」

（「菅茶山の世界―黄葉夕陽文庫」から）

この詩歌を鑑賞しながら、菅茶山八十年の遺芳・遺徳、豊かな感性、人物像を改めて偲ぶとともに、我がふるさとの巨峰、茶山が国内外へ託した不滅のメッセージを末永く次世代へ継承すべく努めたい。